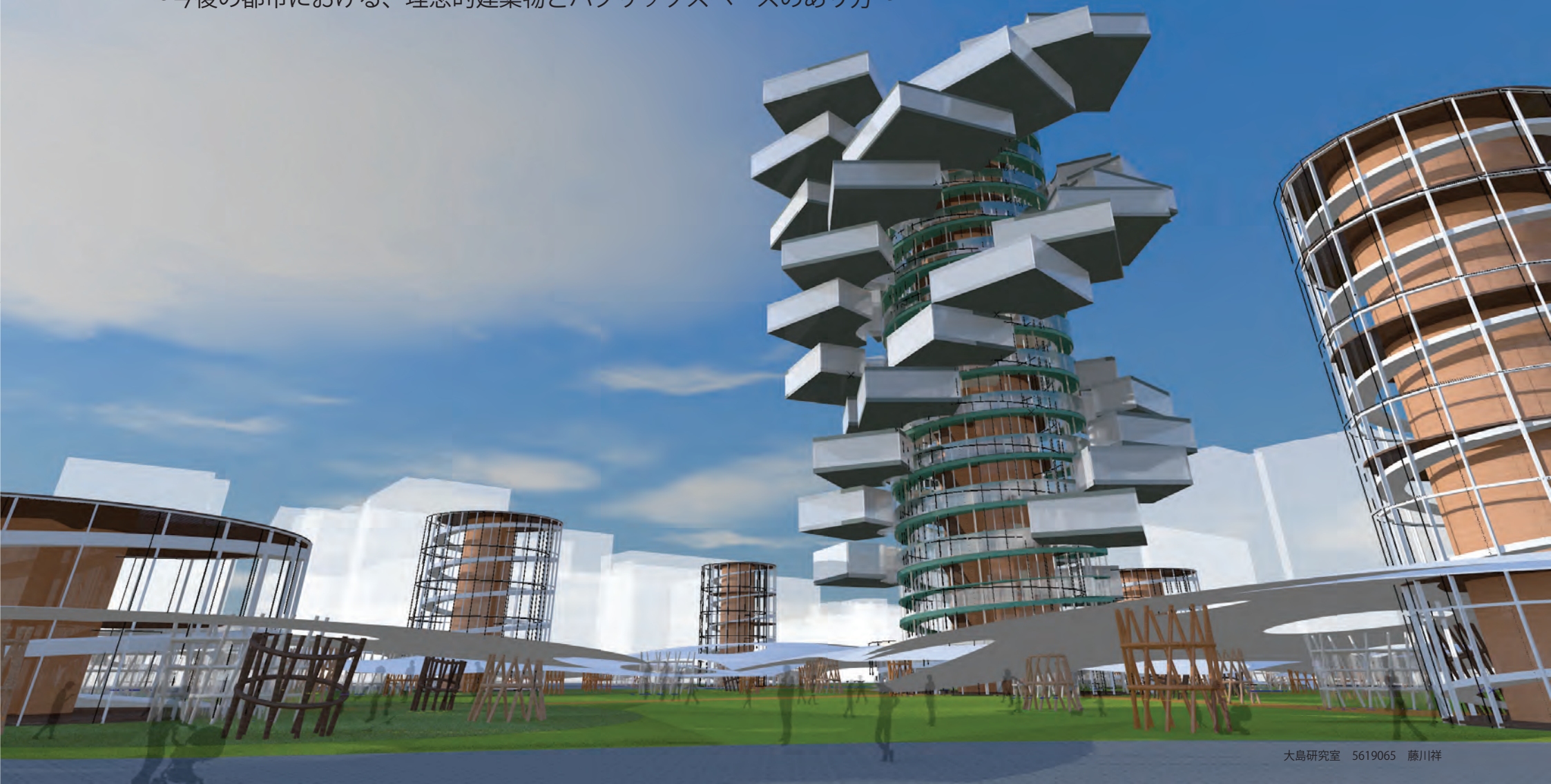


都市に根付くもの

～今後の都市における、理想的建築物とパブリックスペースのあり方～



背景・目的

高松市には、丹下健三氏が手がけた2つの理想的建築物が残されている。これらは当時県知事であった、金子正則氏の「市民に開けた県庁舎を建てたい」「観光県香川の象徴となる建物を建てたい」という理念から構想が始まり、これらの理念を丹下健三によって形作られたものである。旧香川県庁舎では民主主義的市民に開かれた県庁舎を目指し、旧県立体育館では芸術的で象徴となり、市民の健康を推進するような体育館を目指した。これらの建築物は、長年市民に親しまれ都市の一部としてその基礎を形成してきたことから、歴史的、建築物に価値のある歴史的建築物として、後世に受け継がれるべきだと考える。こうした建築物は、香川県高松市だけでなく各地に存在し、建築的、空間的特徴だけでなく、その基本理念は今後の都市づくりに対しても有用なものに成り得ると考える。特に県庁舎は、戦後の民主主義をもとに市民の開かれた建築物の「理念」を、丹下氏がピロティという「パブリックスペース」として生み出した。当計画は、この市民に開かれた「パブリックスペース」を都市の基本ストラクチャーとして捉え、高松市を例に、今後の望ましいパブリックスペースを持つ公共建築及び公共空間の提案を行うことを目的とする



理想的建築物

旧香川県庁舎は、「市民に開けた県庁舎」をコンセプトに設計されたため、市民解放の場が特徴的である。1階にはゆったりとしたエントランス、屋上には当時バーカウンターがあり1階は交流の場であるピロティがある。構造的には当時最先端だったRC造を使用し、伝統的な日本建築で見られる柱、梁の軸組構造を表現している。

旧香川県立体育館は、象徴的で県民が健康的に過ごせる建物にしたいという思いから、瀬戸内の地域性にも対応するように和船を思わせる曲線的な造形であり内部にはアリーナとトレーニングルームの機能が組み込まれている。構造的には、大スパンを確保するために屋根を吊るという斬新な構法をとり、後の代々木体育館のプロトタイプとされている



都市空間

都市におけるパブリックスペース

当計画におけるパブリックスペースとは、老若男女、国籍、身体の不自由など関係なく全ての人が等しく利用できる公的な空間を指す。公共建築ではあるが、行政関係者や特定の利用制限が設けられている公共施設の空間は、「パブリックスペース」とは見なさないこととする

現在の都市空間の構成

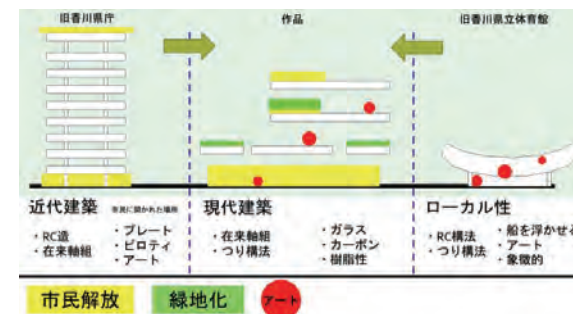
現在の都市空間は、パブリックスペースをもとに大きく分けて3つの空間に分けられる。

- A, 公園や公共施設、公共空間等のパブリックスペース
 - B, 道路や鉄道の公的だが自由な使用ができない場所
 - C, 私用地、民有地又は公共施設であるが使用時間や使用者の制限があり市民が自由に利用できない空間
- これらが不規則に点在し、都市を構成している。



エレメントの反映

本計画で建てられる建築物に旧香川県庁舎と旧香川県立体育館のそれぞれから建築的エレメントが大きく影響している。「市民解放」「緑地化」「アート」の3つを主なエレメントとし取り入れる、また構造的な部分も重要なエレメントとしセンターコアシステム、ピロティ、曲線的造形などが盛り込まれている。



計画敷地

当計画地は旧香川県庁舎の東側近くに位置し、旧香川県庁舎と旧香川県立体育館との軸線状に位置している。現在は、高松市立中央公園として利用されており「パブリックスペース」を有する公共空間となっている。一边が約200mの正方形で総面積34,155㎡の敷地である。芝生広場や遊具などがあり、地下には高松市立地下駐車場がある。香川県出身の偉人の像や、イサムノグチが手がけた遊具が設置されている。また市街地中央からJR高松駅まで伸びる幹線道路に面し、周囲には市役所、県庁舎などの行政機関や高松赤十字病院、高松病院などの医療施設、香川県立高松高等学校、国立香川大学教育学部附属高松小学校などの教育機関など多用途の建物が密集する場である。このような立地よりさまざまな職種、年齢の方が多く行き交う場所の中心で、健康維持だけでなく、教育、交流の面でも利用されている公共空間である。



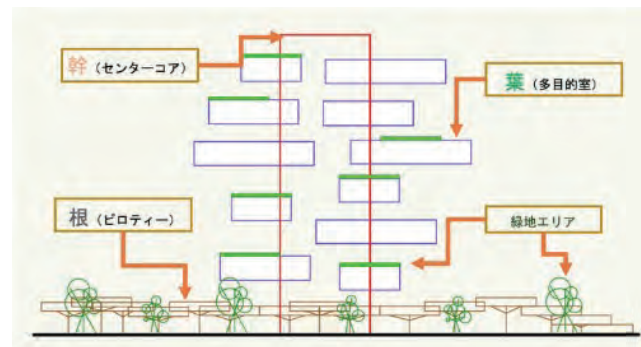
当計画敷地を中心に半径1,500m以内にある高松市におけるパブリックスペースの分布を示した。

北は高松港、南は栗林公園、西は高松魚市場、東は高松刑務所と高松市の市街地が全て含まれている。現在、完全なるパブリックスペースは少なく、私有地とパブリックスペースが混合する空間が多い、特に範囲内西側にはパブリックスペース自体が少なく教育機関が多く存在している。こうしたスペースは市民にとってパブリックスペースとして認識されにくく、ただ存在するだけでうまく活用されていない。当計画ではパブリックスペースを象徴する建物を計画し、多くの人々がパブリックスペースであることを認識しやすくする、そしてこれらを範囲内に広く分布させることによって、これからの都市計画のあり方や、市民にとって住みやすい街づくりのモデルを計画する狙いがある



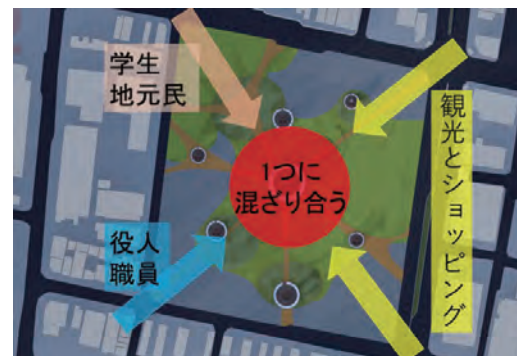
ダイアグラム

本計画は、金子知事が掲げた理念から造られた旧香川県庁舎と旧香川県立体育館から精神的エレメントを応用し、その精神性を新たなパブリックスペースとして高松市全体に広がる計画を行う。市民がより良い生活を送るため、地方都市が持続的に発展し存続できるモデルを創造する。そのために、パブリックスペースを識別できるような構成システムとするとともに、都市内の各敷地に転用でき、拡張可能なシステムを構築する。



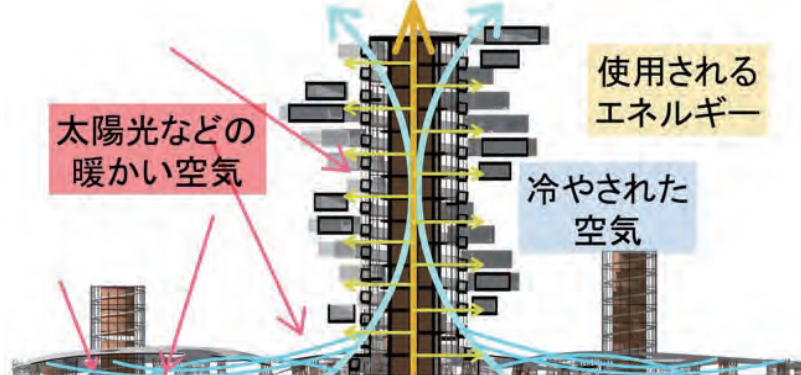
解離と融合

本計画敷地内の配置計画は動線を重視して行われている。敷地周辺にさまざまな用途の建物があるという特徴より、各方面から職種や年齢の違う人が計画地に訪れることが予想できる。よって敷地の外側は訪れる人の属性に合わせた用途のものにする。そして敷地の内側になるにつれて各属性が混ざり合うようになっている。



建物全体の設備循

本計画物は植物の生理循環のように建物全体の設備が循環できるようになっている。電力は葉にあたる個室空間の屋上に太陽光発電を設置し賄う、葉は建物の螺旋状に配置している為、どの向きでも日が昇っている間常に発電が可能である。空調は、冷たい空気は低い所へ移動し、暖かい空気は高いところに移動する性質を利用し、ピロティの影で冷やされた冷たい空気がダクトを通り室内に取り込まれ段々と階層を上がり屋上へ抜けていくようになっている。これら電力、空調、給排水は植物の葉脈ようになっており建物全体を通り循環している。環境に優しく街への負担を最小限に抑え、世界が掲げるSDGsを考慮した持続可能な建築物になっている



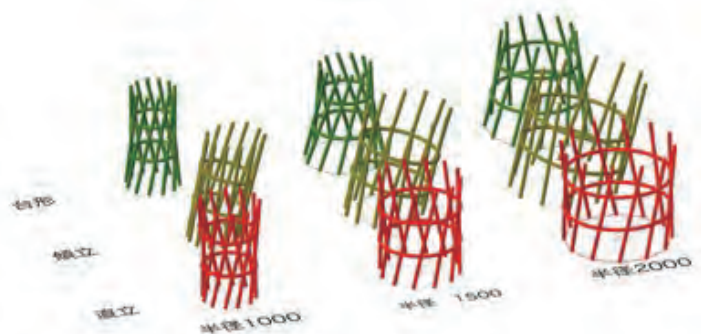
幹に支えられ

本計画の建築物は、大樹がモチーフとなっている。大樹の幹にあたる部分は、旧香川県庁舎でも用いられたセンターコアシステムを採用する。また幹内は螺旋状に吹き抜けを設け上下の様子を確認できるようになっているこれによってフロアで分離されることなく、階層を跨いで繋がる立体的なパブリックスペースを作り上げている



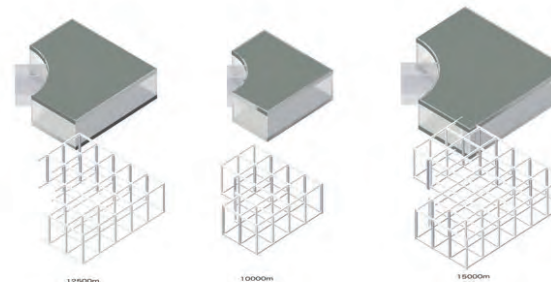
敷地に広がる根

根に見立てたパブリックスペースを支える構造体の単位が計画地全体に広がる。この柱と根はピロティの屋根を支え、敷地内に点在する休憩室の屋根や壁を支える構造体になっている。GLから伸びる平面的なパブリックスペースが今後拡張される象徴となる。



葉のように広がる

幹から伸びる葉は、多目的室となり、セミナーや研修室、今後の県庁舎の拡張室となる。葉の構造体はフィレンディールトラスを採用し、フロア単体で耐久を担っている。また幹からの接合だけでは支持出来ないものもある、それらは吊りや構造体で下側から支える。これらは幹から伸びる枝に相当し、個別的空間である。



配置図、各平面図



メイン・ビル1階平面図 (S: 1/200)



配置図 (S: 1/500)



メイン・ビル基準階平面図 (S: 1/200)



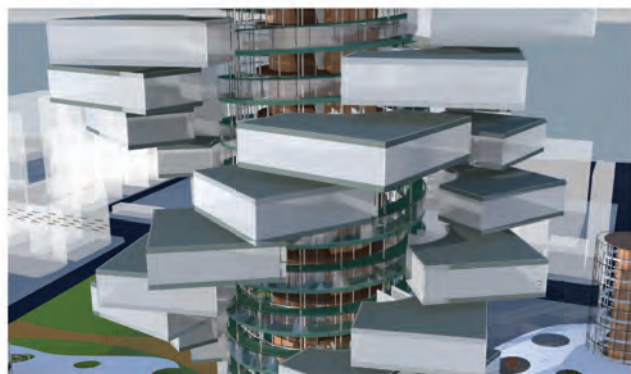
サブ・大ビル1階平面図 (S: 1/200)



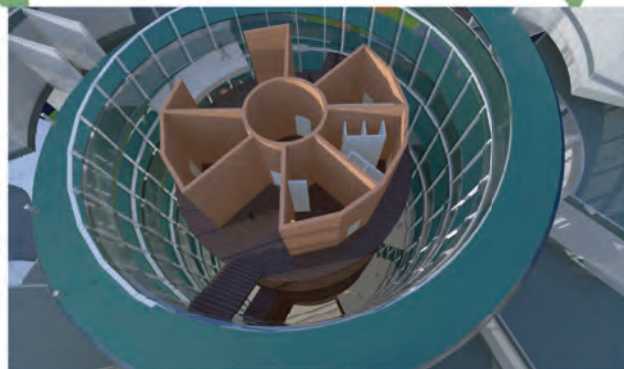
サブ・中ビル1階平面図 (S: 1/200)



サブ・小ビル1階平面図 (S: 1/200)



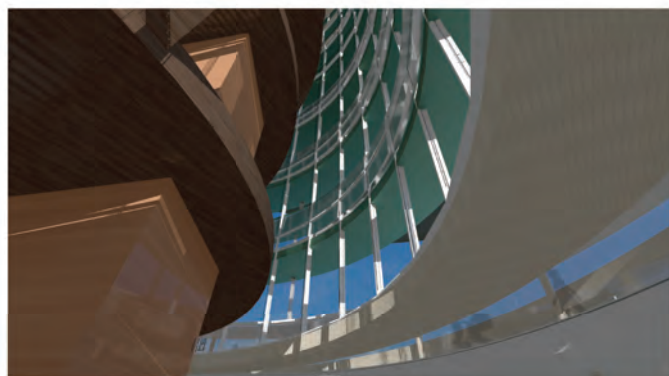
螺旋状の個室スペース



センターコアと室内の様子

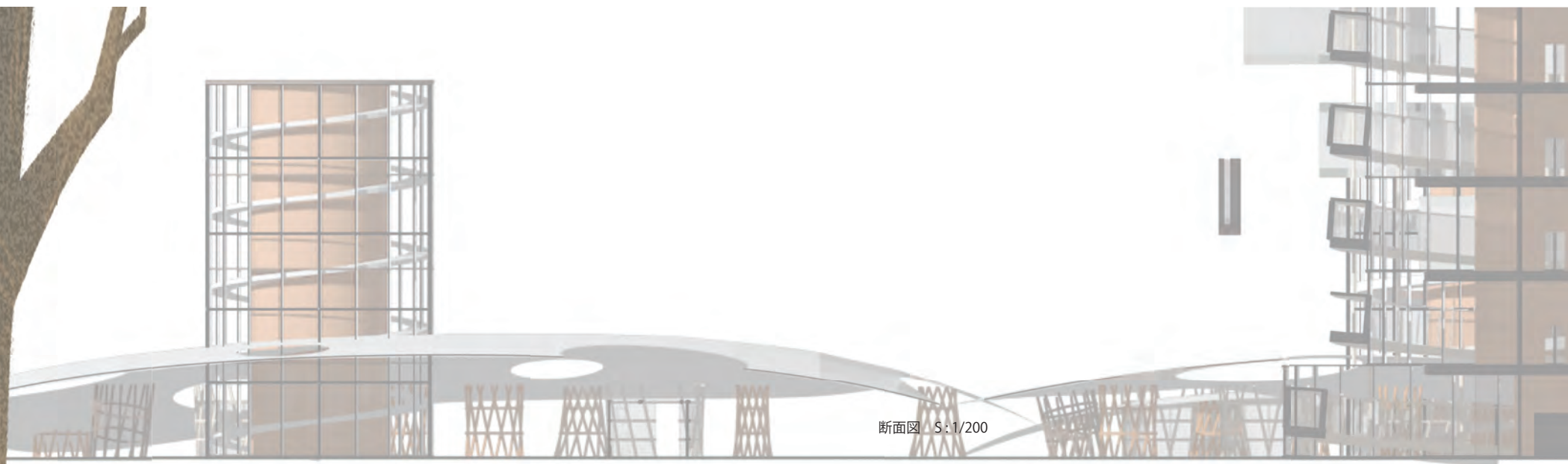


最上階のラウンジ



立体的なパブリックスペース





断面図 S: 1/200



遊具で遊ぶ親子

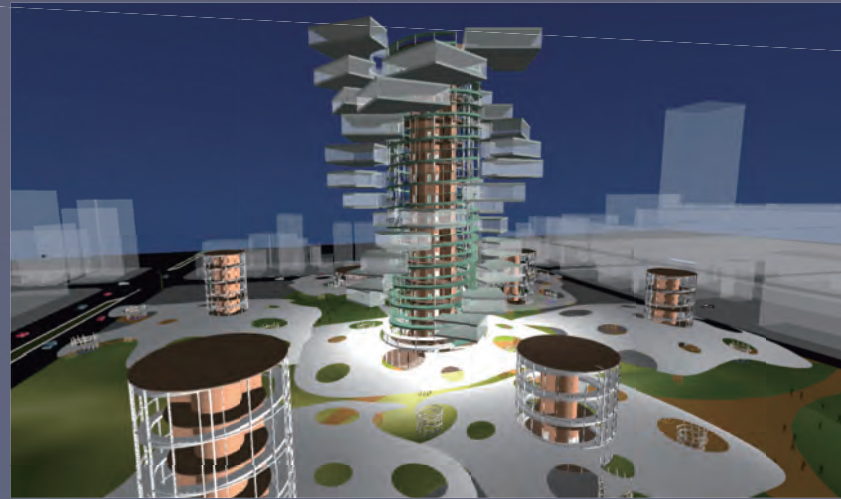


ピロティ下、一階パブリックスペース

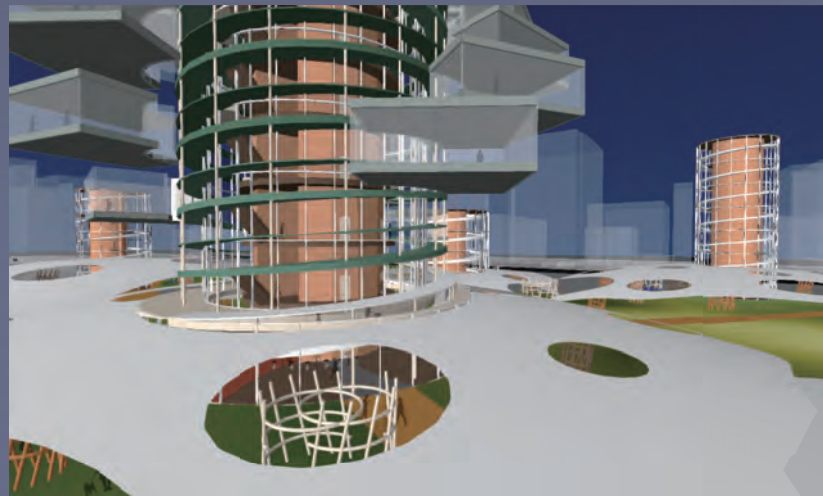




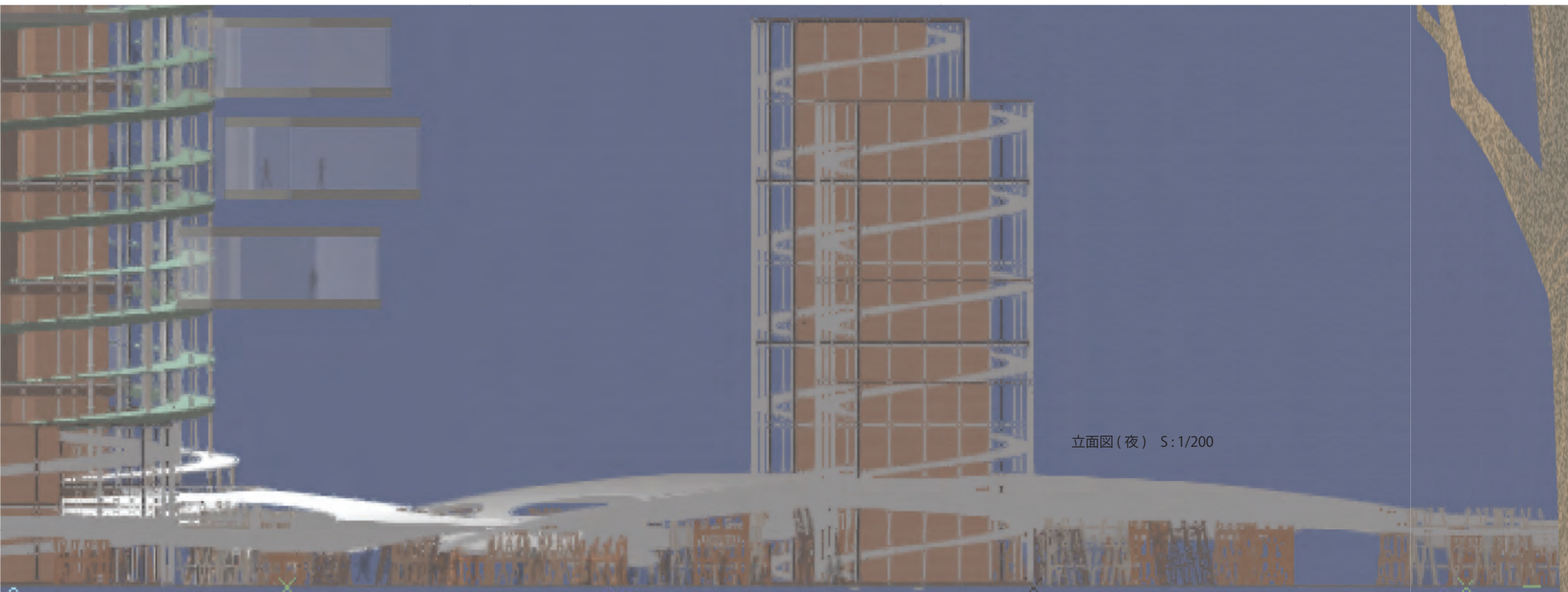
立面図(夜) S:1/200



全体鳥瞰図 (夜)



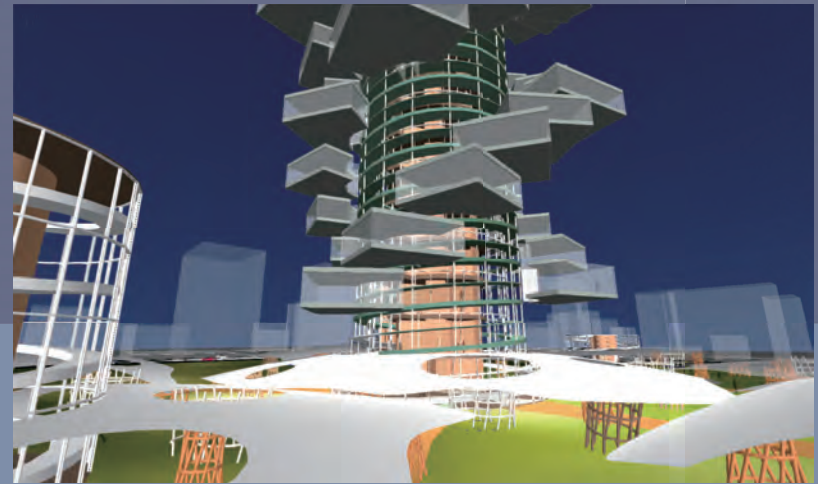
メインタワー (夜)



立面図(夜) S:1/200



室内パース (夜)



ピロティー面 (夜)

都市に根付くもの

大島研究室 561965 藤川祥